

平群の山（矢田丘陵）における松茸利用の歴史

村社 仁史*・種坂 英次**

* 平群町教育委員会文化財部門

** 近畿大学農学部農業生産科学科

A historical overview of the matsutake mushroom in the Heguri-Yama

Hitoshi MURAKOSO* and Eiji TANESAKA**

**Section of Research and Conservation of Cultural Properties, Council of Education,*

Heguri-Cho, 1037-2, Fuki, Heguri, Nara 636-0936, Japan

***Department of Agricultural Science and Technology, Faculty of Agriculture,*

Kinki University, 3327-204 Nakamachi, Nara 631-8505, Japan

Synopsis

Historical changes in production of the matsutake mushroom, which are symbiotically associated with Japanese red pine trees as a secondary forest in the Heguri-Yama (presently called Yata-Hills) located in the northwestern area of Nara Prefecture, are overviewed with focusing on human activities and vegetative succession. Evergreen *Quercus* plants as primary natural vegetation of the Heguri-Yama frequently appeared in literature, such as 'Kojiki', 'Nihonshoki' and 'Manyoshu' edited during the 8th and 9th centuries. The matsutake harvest in this area was first described in 1259 in the literature 'Toji-Hyakugoh-monjo' as seasonal tribute esteemed for Buddhism monks, and frequently appeared in this literature until the 16th century. This mushroom was recorded in contracts as a cash product in the 18th and 19th centuries. Since the early 20th century, the matsutake has become an important economic product of several local communities in collaboration with the tourism initiated by a local railway company. Nevertheless, matsutake production has gradually decreased after the late 1960s, and most local matsutake populations have become extinct. Aged red pine forests have been overtaken by evergreen forest, as it was like in ancient days under natural succession.

Keywords: ethnology, Heguri-Yama, Japanese red pine, Matsutake, vegetative succession

I はじめに

平群山の松茸について、管見資料により色々な視点からその歴史を振り返ってみたい。松茸の発生環境や利用の歴史については、小川真氏¹⁾、岡村稔久氏²⁾、佐原真氏³⁾などの研究報告があり、今回の報文も大筋において目新しいものではない。ここでは、対象を古代に「平群の山」と呼称されていた地域に限定した中で^{注1)}、これまでの紹介資料等について松茸利用の歴史の視点から抽出整理し、平群山の景観の変貌と松茸発生の終焉を見届

けつつある住民からの報告としたい。

II 歌にみる古代の平群山

『古事記』⁴⁾に雄略天皇が後に皇后となる若日下部王（わかくさかべのみこ）に贈った歌に「日下部（くさかべ）の、こちの山と、豊薦（たたみこも）、平群の山の、こちごちの、山の峽（かひ）に、立ち榮（さか）ゆる、葉広熊白檜（はびろくまがし）、本（もと）には、いくみ竹生（お）ひ、末方（すゑへ）には、たしみ竹生（お）ひ、いく

み竹、いくみは寝ず、たしみ竹、たしには率寝(あね)ず、後(のち)もくみ寝む、その思ひ妻(づま)、あはれ」があり、この中で「日下部のこの山(生駒山)」と「平群の山」を区別しており、生駒山地の東側に南北に連なる「矢田丘陵」一帯を平群山とするのが一般的な解釈である(図1)。

同じ『古事記』に、景行天皇の皇子、倭建命が「大和は国のまほろば、たたなづく、青垣、山隠れる、倭しうるはし、命の全けむ人は、置薦、平群の山の熊白禱(くまがし)が葉を、髻華(うず)に挿せ、その子」と「平群の山のクマガシ」を歌い、『日本書紀』⁵⁾にはほぼ同じ歌詞(こちらでは白檀(しらかし))で景行天皇が日向国で国忍びの歌として歌ったことが記されている。また、『万葉集』⁶⁾巻16(3885)にも、乞食者(ほかひ)^{注2)}が詠(うた)ふ二首の1つとして「愛子(いとこ)汝夫(なせ)の君居(を)り居りて物にい行くとは 韓国(からくに)の 虎といふ神を 生け捕りに 八(や)つ捕り持ち来(き) その皮を 豊に刺し 八重豊 平群の山に 四月(うづき)と五月(さつき)の間に 薬獵(くすりがり)仕ふる時に あしびきの この片山に 二つ立つ 櫟(いちい)が本(もと)に 梓弓(あずさゆみ) 八つ手挟(たばさ)み ひめ鐙(あづさゆみ) 八つ手挟み 鹿(しし)待つと 我(あ)が居る時にさ雄鹿の 来

立ち嘆かく たちまちに 我は死ぬべし 大君に 我は仕えむ……〔後略〕とあり、「平群の山の2本のイチイガシ」を歌った長歌が選ばれている。

また、平群の山(矢田丘陵)は、平安時代(承平年間、931～938)に編纂された『倭名類聚抄』⁷⁾記載の平群郡の六郷に包まれるように所在する丘陵であり^{8,9)}、平群地域の呼称を代表する存在として古代の人々に親しまれていたことであろう^{注3)}。これらに歌われた内容から、平群山は古代に歌垣の場として男女が恋の歌を交わし、鹿の若角(袋角)をとる薬狩の場として広く知られていた。当地において歌い継がれていた「歌」が、天皇や皇子の逸話に仮託して位置付けられたことであろう。そこには様々な檜の巨樹林が緑深く繁茂し、その葉付の枝を髪に挿して、檜の生命力を受け取る儀式も行われていた⁹⁾と考えられている^{注4)}。クマガシの種類については、ハビロ(葉幅が広い)クマガシやイチイガシ、シラカシの表現から、特定のカシに限定する必要はないと考えられる。また、平群臣の祖、志毘(しび)(『日本書紀』では「鮪」)を中心とした歌合わせの所在も、『古事記』では「歌垣」としか記されず(『日本書紀』では海柘榴市(つばいち))、事の真偽は別として、記録者の意識は「平群山の歌垣」であったかもしれない。

こうした内容から、平群山一帯はカシなどの常緑広葉樹が密生する自然豊かな環境が想起され^{注5)}、松茸の発生に適した環境ではなかったと考えられる。平群郡飽波郷にあたる安堵町東安堵遺跡の発掘調査に伴う縄文晩期の古環境の復原でも、「アカマツ」などの二次林の広がりは見られなかったことが確認されている¹⁰⁾。矢田丘陵周辺の子墳時代頃までの遺跡の広がりも限定的であり¹¹⁾、広葉樹林帯で採取される「ヒラタケ」などの菌類が秋の食卓を彩ったことであろう。

Ⅲ 遺跡から知られる開墾の経過

遅くとも奈良時代には条里制が施行され¹²⁾、中世前半段階になると文献上で荘園の広がりが確認できる^{13,14)}。これまでの平群町域の発掘調査の結果からも尾根や微高地(古墳も)を削平して地形の平坦化を図るなど農地造成の広がりや園地を持つ土豪の居館的な建築遺構が確認されるなど¹⁵⁻²²⁾、

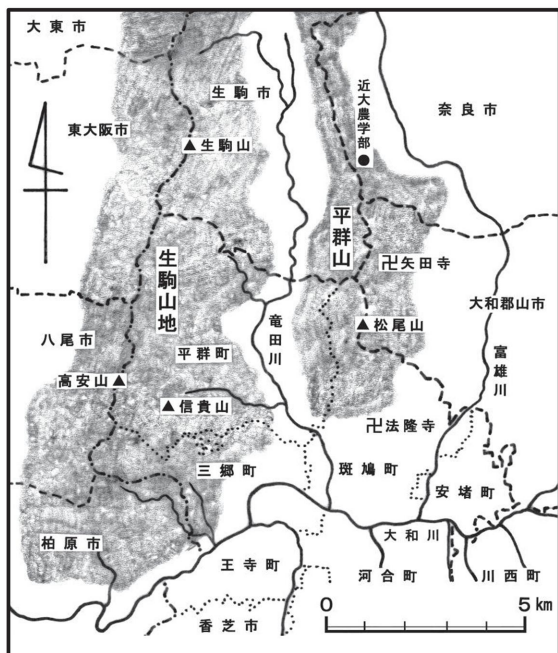


図1.「平群山」と呼称された矢田丘陵を含む現在の行政区域

景観の人工的な改変が進んでいることが確認されている。

特に三里遺跡では三里古墳の東 150 m 付近で豪族居館に伴うとみられる鎌倉期の石組みの園地遺構¹⁵⁾、梨本遺跡でも長屋王墓の 50 m 西側でやはり同時期の小規模な石組みの園地を配した掘立柱建物が確認されており¹⁶⁾、町内各所の調査¹⁷⁻²²⁾においても中世段階の農地造成を伴う耕作地の広がりを確認している。槻原から椿井に導水されている「乾殿（いぬいどの）用水（大井手（おおいで）用水）」など広域にわたる灌漑用水^{23,24)}も、遅くともこの段階には整備が進んだと考えられる^{注6)}。当然のことながら山林の伐採も進み、里山的な二次林としての松樹の繁茂が考えられる。生産拡大に向けて大開墾時代が幕を開けたといえ、結果として松茸の発生環境が整備されつつあったのである^{注7)}。

Ⅳ 松茸の資源活用

1. 中世 …… 献上品

平群町北東部、槻原（しではら）・上庄（かみしょう）・西向（にしむかい）・櫛原（いちはら）の一部に広がる東寺（教王護国寺）の荘園、「平野殿庄（ひらのどののしょう）」に関係する史料が東寺百合文書に多数含まれており、この中に松茸の献上に関連する記録²⁵⁻³⁵⁾が知られている（表1）。こうした松茸記事に注目した論攷³⁶⁻⁴⁰⁾も複数発表されており、田村憲美氏^{36,37)}が平易にまとめられている^{注8)}。

正元元年（1259）に3人の名主の「私山」から合計90本の松茸を預所がとりまとめて進上（ヨ10③～⑥）しており、後白河法皇の愛娘・宣陽門院から皇室領平野殿庄の寄進を受けた仁和寺菩提院行遍も賞翫したとされている。

松茸は「ミねんぐ」とよばれ、東寺の平野殿庄の在地支配を象徴する産物^{注9)}に位置付けられており、弘安年間（1278～1288）に供僧が預所朗遍の非法を追求した時、とくに松茸については、『一山之景物』を大師三宝に供えず、みな以て私用せしむるの条罪重し』（ネ6）との記録がある。気候要因での当たり外れや生業として山林を伐採する住民らとの利害もあり、安定した献上は望むべくもなかったのであろうが、東寺の僧侶達にとって、秋の楽しみとしての期待度の高さが読み取れるところである。こうした背景から、応永15年（1408）とみられる金勝寺年行事清尊書状（ネ177）には、東寺の末寺、金勝寺（平群町槻原）に対して松茸の進納を命じており、金勝寺を介して惣による松茸納入を期待する動きもみられたのである。

松茸の進上は応仁の乱頃にはほとんどなくなり、東寺の期待に答える状況ではなかったものの、平野殿庄からは荘園制度が動揺する南北朝以降も永く絶えず、戦国時代の天文～永禄年間まで年貢が送られている。（エ110・ネ157など）在地住民にとっては、荘園支配者層の期待する「ミねんぐ」にとどまり、地域での消費につながる収穫の対象ではなかったのである。そして、中世後半には、茶席や懷石膳に松茸の記録がみえ、季節の珍味と

表1 東寺百合文書・松茸関係文書（抄）

ヨ10③	正元元（1259）年9月27日「大和国平野殿庄預所定宴松茸送進状」 「平野殿例進松茸九十本、相副送文三通、令進上候、……」
ヨ10④	正元元（1259）年9月25日「大和国平野殿庄良玄松茸送進状」 「進上御年貢松茸二十本右、進上如件、正元々年……」
ヨ10⑤	正元元（1259）年9月25日「大和国平野殿庄僧範舜松茸送進状」 「進上御年貢松茸五十本右、進上如件、正元々年九……」
ヨ10⑥	正元元（1259）年9月25日「大和国平野殿庄現林松茸送進状」 「進上御年貢松茸廿本右、進上如件、正元々年……」
ネ6	文永7（1270）年10月17日「聖宴申状案」 預所聖宴をしても以下のように歎ぜしめる状況となった。 「……当庄百姓不レ似二余所一於レ事強剛候ノ間難治事候、近年松茸如二員数一不レ進候之間、数ヶ度雖二相尋候一不レ及二返事一候……」
ネ177	応永15（1408）年？3月29日「金勝寺年行事清尊書状」 「……毎事不合期候松茸事、先年蒙仰候之時、彼松茸山在所、今者野山ニ成候之間、松茸一本不生出候……」
エ-110	天文21年（1552）12月8日「大和国平野庄公用錢支配状」
ネ-157	永禄12年（1569）3月29日「大和国平野殿庄内金勝寺年行事清尊書状」

* 文書史料典拠文献：『東寺百合文書目録』²⁵⁻²⁹⁾、『鎌倉遺文 古文書』など³⁰⁻³⁵⁾。

** 東寺百合文書には、上記以外に10数例の松茸関係文書が知られている。

して上流階層の食前を飾っていた段階といえる²⁾。

2. 近 世 …… 商品化

平群町域では残念ながらこの段階の資料が未確認であるが、「平群山」の南東部、斑鳩町では法隆寺の裏山、梵天山（ボーデンヤマ）における松茸山の採取権を郡内の人物^{註10)}が法隆寺から請け負った記録が紹介されている^{41,42)}。寛保3年（1743）の請山が一番古い記録とされ、寛延4年（1751）の「梵天山松茸取の請負願」の写真と文面が掲載されている⁴¹⁾。請負料は銀三百三十三匁で、請負人以外は入山せず、草木や小石も採らず、山内での宴会等をしないとの誓約文である。この内容から、松茸の採取権のみを請け負っており、寺院の持山である理由からかもしれないが、あくまでも出荷用の位置づけである。江戸時代中期にはいまだ貴重な産物として、「松茸山」を大切にしていたことを確認できる資料である。誓約文中に「山内での宴会をしない」ことを含んでおり、平群の山一帯では山中での松茸宴会がこの時期には一般化していなかったのではないかと推測される。

また、『斑鳩町史』⁴³⁾の法隆寺村の部分にも、文化9年（1812）の「野山松茸請負一札」が収録されており、江戸中期から後半にかけて松茸山の請負状態が継続していたことが確認できる。

3. 近・現代 …… 事業化

(1) 全 般

近代以降は資料や伝承者も多く、かなり具体的に松茸に関する状況を把握することが出来る。全体として、20世紀前半が採取量のピークであり、松茸菌の喜ぶ環境が広域に存在したことが伺える。「大軌・参急電車、松茸山紹介パンフレット」は大阪電気軌道と参宮急行電鉄による奈良県下を中心とした松茸狩りの両面刷りパンフレットである(図2,3)。企業名から昭和6年～15年の作成で、日中戦争の最中の時代背景から、「山で鍛えよ 国民心身鍛練運動」のキャッチフレーズで集客をしている(図2)。鉄道会社と提携した指定山として鍋料理などの料金を統一しての観光用松茸山経営が盛んだったのである。沿線図(図3)にある松茸マークから、この時期に広域で松茸が採れ、特



図2. 「大軌・参急電車、松茸山紹介パンフレット」(昭和6～15年頃)の見開き外面

に平群町域にあたる矢田丘陵西側での密度の高さが目に付く。矢田丘陵東側には鼻高山（びこうざん）として奈良市の靈山寺、矢田元山として大和郡山市の金剛山寺（矢田寺）、妙見山として斑鳩町の法輪寺がある。パンフレット左下の一覧表には最寄り駅から指定山までの時間と距離、近隣の観光名所も記されており致せり尽くせりである。また生駒山地では平群駅西方の福貴山や八尾市の高安山などの指定山の他、信貴山周辺には指定外松茸山としながらも3ヶ所の松茸マークが記されている。同様に、矢田丘陵においても後述する斑鳩町の梵天山、大殿山（おどのやま）、天下山（てんかさん）など、このパンフレットに記載のない松茸山も多数存在したのである。なお、沿線図にある「茸山（たけやま）駅」は昭和2年、元山上口駅と生駒駅間が開通した際、秋期のみ臨時停車駅（臨時開設駅）としての設置であった^{44,45)}。このパンフレットの時期を含めて昭和26年に東山駅と改称されて常置駅になるまでは観光用臨時駅であり、6月のまんぐわ淵（馬鞆淵）での蛭狩り（源氏蛭）と10月の松茸狩りシーズンのみ停車していた⁴⁶⁾。

た⁴⁶⁾。

(2) 斑鳩町域^{41, 42, 47, 48)}

前述の西里所在の梵天山や大殿山、北庄の天下山等でも1960年代まで松茸狩りが行われ、七輪の炭で松茸のすき焼きを囲み酒など酌み交わし大いに賑わったという。最盛期は1930年代だったとされる。昭和16年（1941）の秋まで、梵天山や大殿山では秋のシーズンになると、テントを幾つも張り、採り立ての松茸を焼いたり炊いたり、酒の肴にプンプンといい匂いがいっぱいである。幾組ものお客さんが仲居さんの三味線や太鼓でドンチャン騒ぎの散財をした。シーズン中は村衆が組をつくり、毎晩交替で松茸泥棒の山番をした。村衆にとって山の夜の酒盛りは格別な楽しいコミュニケーションでもあった。しかし、太平洋戦争中は梵天山で松根油を採って山が荒れたり、大殿山では戦時下で山で騒げない中、次第に収量も減少していったという。一方、矢田丘陵の稜線付近、斑鳩町と平群町の両町にまたがる白石畑集落では、昭和35年（1960）頃まで松茸が何十貫（1貫=3.57kg）も採れ、村で適当に分けて後は八百屋に

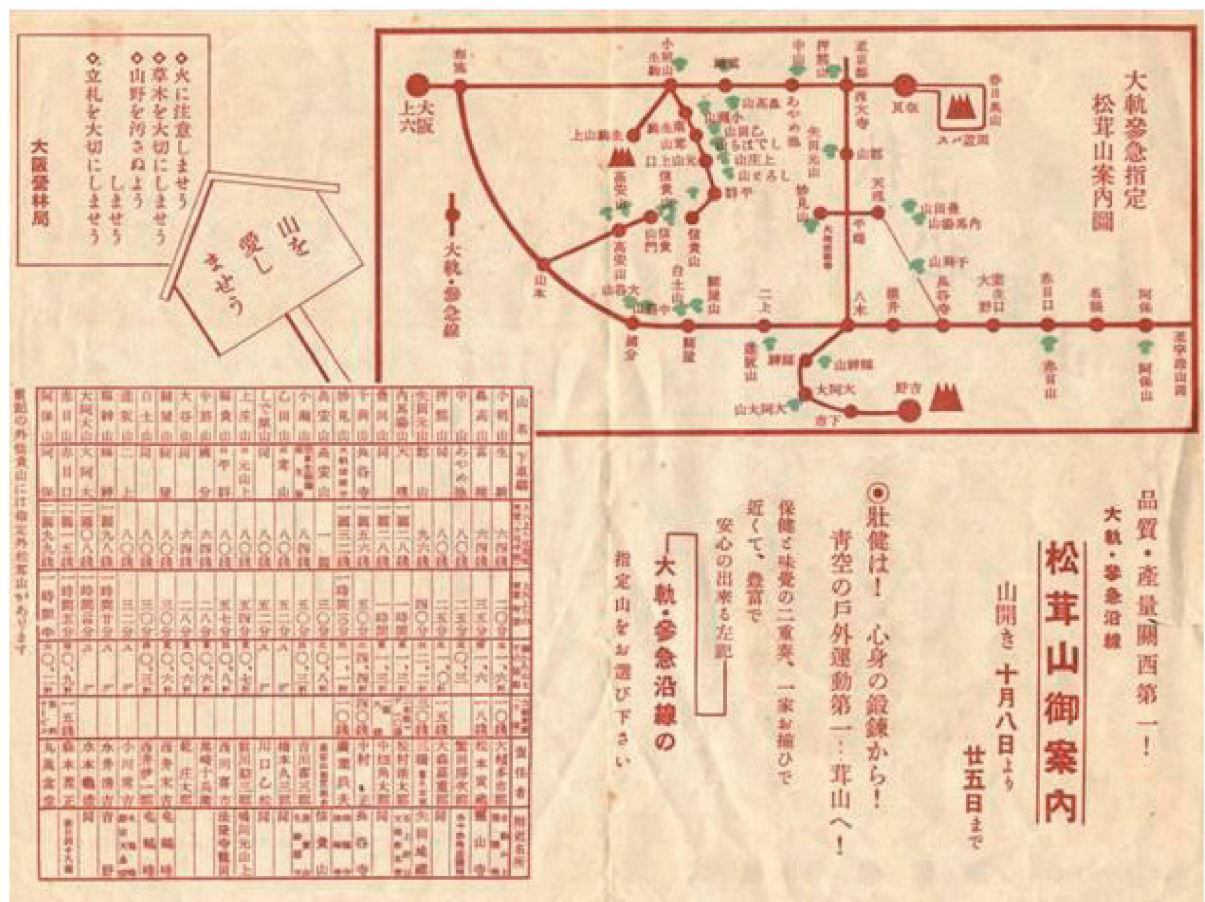


図3. 「大軌・参急電車、松茸山紹介パンフレット」（昭和6～15年頃）の見開き内面

売ったという。

(3) 生駒市域

『生駒市誌』V⁴⁶⁾によると、生駒市北部地域の外観と特色の「植生」の項で、「本地域の山地は、花崗質土壌や、大阪層群の土壌地帯であり、酸性土といえる。そのため、比較的酸性に強い植生の植物が、自生している。標高150m～300mの丘陵性山地に、かつては、中腹から山頂にかけて、酸性土壌に強い赤松が見事な林相を呈し、秋ともなれば香り高い松茸が豊富に産出した。田原松茸はとくに良質で有名であった。奈良・大阪に出荷されたり、親せき・知己を集めての松茸を囲んだ宴席が、山腹で、にぎやかに催されたものである。…中略…、戦時中赤松は、軍事用として、伐採、供出された。戦後30年代に入り、松喰虫が多量に発生、かつての赤松林の面影はなくなり、松茸も一部に少量産出するのを除いては、殆ど見られなくなった」と記されている。また、生駒市中部地域の外観と特色の「植生など」の項で、「二次林としてのアカマツを中心とした松林が自然環境保全地区の中心となっていたが…中略…、戦時中この松は軍用材として伐採されたのと、近年の松喰虫の発生で枯かつするものも多いのとで、追々となくなりつつある。アカマツ林に見られ、人々に珍重されていた松茸も今ではほとんどその影をひそめた。エネルギーの近代化にともなって薪炭材の需用がなくなって立ち枯（松の枯木）の利用も用材としての松材の利用も少なくなっている」とあり、松林の減少記述が丁寧に記されている。生駒市南部地域の外観と特色の「植生」の項では、「二次林としての松林や杉、桧の林も漸く多くなったが、近年は松喰虫で松林は大きな被害をうけて、嘗ては松茸の産地として著名な所もあったが、今はその影をひそめた」とある。さらに、『生駒市誌』資料編IV⁴⁹⁾の年中行事の項でも松茸の季節、松茸山の開放の記述がある。このように、生駒市域の北や南部地域では、松茸の著名な産地が分布していたことが明らかであるが、戦中戦後に衰微していく様子が窺える。

(4) 大和郡山市域

「信貴生駒 電車沿線名所案内」⁵⁰⁾に、原色の路線計画図（折図）があり、沿線の名刹として矢田山（金剛山寺）部分に「松茸名所」と記している。また、本文中の矢田山金剛山寺の解説中に「附近一帯ヲ矢田山ト称シ松茸ノ産地トシテ其名高ク秋

季遊山ノ客多シ」とある。大正11年段階に沿線の集客ポイントとして取り上げており、この時期に著名な産地であったことが伺える。

(5) 平群町域

平群町では200種以上のきのこ類の自生が記録されており⁵¹⁾、なかには広葉樹に発生するエノキタケやヒラタケなど既に栽培市販されている食用きのこ類も自生するが、多くの住民はこれらに対して全く関心がない。20世紀末まで食用として記憶されてきた野生きのこ類は松と共生する9種に限られ、アカマツ林に付随したきのこ食習慣が成立していた^{51,52)}。椿井の常念寺境内に建つ地蔵屋形の南東の鬼瓦には松茸が描かれており⁵³⁾、以下にみるように「松茸」は地域経済とコミュニティ結束の要素のひとつでもあった。

「奈良縣風俗志編纂資料」⁵⁴⁾

この資料の年中行事、四季の遊賞、(ほ)茸狩の項に、「附近ニ松茸山アルヲ以テ親族知友等ヲ招待シ茸狩ヲ催スモノ多ク大抵行厨ヲ携ヘ山上ニ於テ酒食ヲ行ヲ例トセリ」とあり、平群町の四季の行事の中に「茸狩」が取り上げられ、大正4年に平群町域では普通に親類縁者などと「茸狩の宴」を行っていたことが分かる。この記録から、採集された松茸の相当量が出荷されずに地域や自家で消費されていたことが確認できる。

昭和2年「信貴生駒 電車沿道名所案内」⁵⁵⁾

この案内は、現在の近鉄生駒線の王寺駅～生駒駅間が全線開通した段階で発行された沿線の観光案内冊子で、写真を多用し、駅ごとの見どころを



図4. 昭和4年「奈良縣生駒郡平群村村勢要覽」(地図面の平群村北東部)

紹介している。

平群駅

◇平群山（平群駅から西四丁）

「平群山は松茸の産地として名があり秋には遊山者で時ならぬ賑わひを呈する、…後略」

（大軌・参急パンフの「福貴山」のあたりか？）

元山上口駅

◇金勝寺（元山上口駅附近北二丁）

「前略…、春はわらび、夏は螢、ほととぎすに恵まれ秋は栗やしいの木の実がみのり加ふるに松茸の産地として名が高い、…後略」

昭和4年「奈良縣生駒郡平群村村勢要覧」⁵⁶⁾

この資料にはカラーの地図と要覧データが両面印刷されており、表面の地図には茸山（東山）駅、元山上口駅、平群駅の東側と北福貴附近に松茸マークが描かれている（図4）。裏面のデータでは、林野産物に松茸（生ノモノ）があり、数量が11,500斤、價額が5,175円である。1斤が600gであり、この年、6,900kgの収穫があったことになる。ただし、これは出荷された数量であり、地域や自家消費分は含まれておらず、収穫量の実数は更に多かったのである。ちなみに米が収穫量9,031石で價額が253,748円で、松茸の利益は米の2%強にあたる。また、村長の俸給年額が840円、書記6名分が3,024円である。単純計算は出来ないが、昭和4年における松茸の収穫量並びに現金収入のウエイトの大きさが見て取れる。

「上庄のあゆみ」⁵⁷⁾

平群町の北東部、元山上口駅の東方一帯に所在

する上庄大字の歴史をまとめた冊子に、「松茸ご飯」の項があり、詳細かつ具体的な記述がなされている。「古来より昭和40年頃までは、上庄の東の山で5組と呼ばれた末広山・笠松山・中田山・吉崎山・乾山は、日本一と言われるほどの松茸の産地であった。昭和10年頃までは、季節ともなれば、毎朝、各山々で収穫された松茸を近隣の商人が競い合って買い付けに來られ、朝市で販売され、朝市がより一層のにぎわいを呈していたとのことであった。一方、5組の各山々に於いて、愛好会がのぼりを揚げ盛大に松茸狩りを楽しんでおられたとのことであった。その後、戦争の影響により松茸狩りは一時中断せざるをえなくなったが、戦後昭和25年頃より復活し始め、來山のため利用された信貴生駒電鉄（現近鉄生駒線）が満員状態にまでなったと言われている。また、5組の山々からは、三味線・太鼓・歌声が聞こえ戦前以上にぎわいを呈していたとのことであった。昭和40年頃までは、大阪より観光バスを利用してまで松茸狩りを楽しみに來られるほどに賑わいを呈していたが、その後、土地開発、酸性雨、また、温暖化等々により針葉樹林から広葉樹林へと自然環境の変化が進み、その影響により松茸の収穫量も徐々に少なくなっていき、昭和50年頃からは松茸狩りも出来ない状況になった。しかしながら、婦人部として松茸狩りに付き物であった松茸ご飯の伝統を守らねばとの思いから、過去、諸先輩方が色々ご苦労のすえ築かれた炊き方、味付け、及び、水加減等々の手法を受け継ぐことにさせていただいた。…後略」と記されている。

現在、当時の松茸狩りの宴会小屋が橿原大字の山中に残っている（図5）。

V まとめ

〔農山村の変貌と松茸産出の衰微〕

生活環境の変化から、薪や燃料としてのコクマ掻きが行われなくなり、集落に近接した里山が荒廃、松食い虫の被害も追い討ちをかけ、赤松林が急速に姿を消しつつある。松食い虫の被害は昭和54年度をピークに大発生し、現在でもピーク時の3割程度の被害が続いている⁵⁸⁾。地元の記憶から、松茸減少の時期よりやや遅れており、主要因とは言いがたいものの、里山の荒廃による赤松の樹勢後退に重なって被害を拡大し、松茸の不作化に拍



図5. 平群町橿原の山中に残る松茸狩りの「宴会小屋」
（平成20年11月撮影）

車をかけた可能性が高い。

平群山の景観から、茅屋根をトタンでカバーした大和棟や入母屋造りの古民家建築が姿を消し、里山の維持管理と密接だった「カマド」「薪風呂」がなくなっている。かくして、家庭の便利さと引換に里山が松林から雑木林に変貌し、山裾は太い孟宗竹の林に飲み込まれ、山の幸は秋の松茸から春の筍へと移り変わっている。山の保守には実生活と離れた意識的な維持管理が必要な時代となった。

最初に紹介した『古事記』⁴⁾の雄略天皇の歌には、平群山や生駒山（此処の山）の山裾に「いくみ竹・たしみ竹」が広がる様子が歌われているが、我々の目にする「平群の山」は再び古代以前の景観に戻っていくのであろうか。ほどよく人の手が入っていた山林・里山の荒廃が進む現在の「平群の山」を見ると、どの様な歌詞（カシ）で表現すべきかを思いながら箇筆したい^{注11)}。

注 記

注1) 後述するように矢田丘陵を中心とする範囲として捉え、現在の行政区域では、平群町・生駒市・斑鳩町・大和郡山市・奈良市の一部を対象としている。

注2) 乞食者（ほかひひと）は、門付けなどで寿言（ほかひごと）を唱えて回る芸人（遊芸の専門家）を指す。「ほかふ」は「寿ふ・祝ふ」ことである。この1首目は鹿が己が身を犠牲にして大君に奉仕することを詠っている。2首目はカニの歌である。いずれも農耕社会にとって害をもたらす動物であり、鹿やカニの芸能は、それらが人間に奉仕するという豊作余祝行事として継承されたとされる。平群の山での歌垣に伴うこうした歌が、平群地域が古代王権の中に取り込まれていったことを示す平群氏の服属伝承との解釈がある。

注3) 平群郡は平群郷（生駒市南部・平群町域）、那珂郷（三郷町域）、坂戸郷（斑鳩町西部域）、夜摩郷（斑鳩町東部域）、飽波郷（安堵町域）、額田郷（大和郡山市南西部）の六郷からなっている。平群山やクマガシについて、『平群町史』⁸⁾で考証され、平群山を夜摩（山）郷の裏山とされ、平群郷の東側、つまり矢田丘陵としている。明治30年4月1日に郡制の実施に伴い、

添下郡と平群郡を合わせて生駒郡が設置されている。

注4) 「平群山」の歴史的解釈や、「クマガシ」の記録について、辰巳和弘氏⁹⁾により整理されている。「ハビロクマガシ」を『古事記』垂仁記の記事から甜白麩（あまかし）の前にあり、神意を問う聖なる樹木として位置付け、古代におけるカシの位置づけをしている。

注5) 『平群町史』⁸⁾の「巨樹・老木・社寺林」によれば、平群町の社叢などの樹木について、広葉樹ではアラカシ・ツブラジイが多く、次いでシラカシが繁茂している傾向がみられる。巨木となり良材の採れるイチイガシは既に伐採つくされたためか、確認されていない。現在平群町に残る比較的古い広葉樹林も、ほとんどが原始林を伐採した後の二次的な林相と考えられよう。

注6) 曾歩々々氏（そぶそぶし）の一族と考えられる乾殿の関係したとみられる用水が、竜田川の大井手用水以外に椿木川（大釜川）、伊（井）文字川でも知られる⁸⁾。乾殿用水の開削時期は、長屋王墓西側の道路拡幅工事に伴う発掘調査（村社担当）により、鎌倉前期以前と確認されている^{23,24)}。

注7) 松茸の発生環境と松林の樹齢の関係について、小川真氏¹⁾の研究があり「マツタケは樹齢約20年から60年生のマツ林で発生し、最盛期は樹齢30年から50年の期間で、林内に腐葉層が堆積したり灌木が茂ってくると発生を停止する。つまり、マツタケの発生時期はマツ林の陽生（典型）林の状態である」とされる。瀬戸内地域におけるマツ林と松茸生産量の変遷については、[データベース「えひめの記憶」より－『ふるさと愛媛学』調査報告書「瀬戸内の島々の生活文化」（平成3年度）]の「アカマツ林の変遷」でも包括的に論考されている。

注8) 松茸の上進については、様々な論点^{23,36-40)}からの検討がある。

①田村憲美氏³⁶⁾は「山林用益形態とその変化」の項で、「年貢松茸備進と私山」「山林の野山化と在地諸階層」をとりあげ、松茸をめぐる問題を検討している。松茸の備進について、正元元年（1259）に90本、文永6年（1269）に40本、弘安2年に10本と減少しており、その理由を、山の荒廃・松樹の高齢化（赤松

の自然史的条件)による樹勢の衰微としている。一方で、私山から入会山への支配形態の変化を指摘し、鎌倉時代中・後期の動きとして松茸の産出する山の野山化も指摘している。

②小泉宣右氏³⁸⁾は平野殿庄内の支配形態の変化の中で松茸の不進を取り上げている。

③井上良信氏³⁹⁾は平野殿荘の初期の動向の中で松茸の不進と東寺側の期待度を取り上げている。

④網野善彦氏⁴⁰⁾は、平野殿庄内の支配形態の変化の中で松茸の不進を取り上げている。

注9) 通常、「(御)年貢」といえば米のことであるが、山間の小規模荘園である平野殿庄には水田は少なく、東寺僧にとって特産の松茸が最優先産物に位置付けられたことからこの呼称となったとみられ、公事とされた筍や瓜とは別扱いになっている^{36, 37)}。

注10) 寛延4年(1751)の「梵天山松茸取の請負願」では、松茸請主が辻本清九郎、辻本平六と署名捺印があり、地元の聞き取りでは平群町上庄の旧家、辻本家に関わる人物の可能性はある。

注11) この報文作成にあわせて、あすのす平群(平群町観光文化交流館・町立図書館)において、企画展「平群の山 松茸事情」を2012年10月中に、土曜講座を同月20日に実施した^{59, 60)}。

VI 引用文献

- 1) 小川真. 『「マツタケ」の生物学(補訂版)』築地書館(1991)
- 2) 佐原真. 『食の考古学』東京大学出版会(1996)
- 3) 岡村稔久. 『まつたけの文化誌』山と溪谷社(2005)
- 4) 新編日本古典文学全集1『古事記』小学館(1997)
- 5) 新編日本古典文学全集2『日本書紀①』小学館(1994)
- 6) 新編日本古典文学全集9『万葉集④』小学館(1996)
- 7) 『倭名類聚抄』国立国会図書館デジタル化資料 卷第六 大和国第六十九
- 8) 『平群町史』平群町史編集委員会(1976)
- 9) 辰巳和弘. 「たたみこも平群の山」『地域王権の古代学』白水社(1994)
- 10) 『東安堵遺跡』奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告書 第46集 奈良県立橿原考古学研究所編(1983)
- 11) 『奈良県遺跡地図』平成22年3月1日改訂版 奈良県教育委員会(2010)
- 12) 「平城遷都後の奈良盆地の景観」『奈良県の歴史』山川出版社(2003)
- 13) 国立歴史民俗博物館博物館資料調査報告書6『日本荘園データⅠ』(畿内・東海道・東山道)(1995)
- 14) 奈良県史10『荘園－大和国荘園の研究－』朝倉弘 奈良県史編集委員会 名著出版(1984)
- 15) 「平群町 三里遺跡発掘調査概報－圃場整備事業に伴う調査－」『奈良県遺跡調査概報1982年度』第2分冊 奈良県立橿原考古学研究所(1983)
- 16) 「平成15年度 梨本遺跡発掘調査終了報告」平群町教育委員会(2004) [未刊行]
- 17) 「平群町三里遺跡第5次発掘調査報告書」『奈良県遺跡調査概報1997年度』第1分冊 奈良県立橿原考古学研究所(1998)
- 18) 『椿井西宮遺跡発掘調査概報』3. 4. 5次調査 平群町教育委員会(2005)
- 19) 「三里遺跡 町5次」『平群町 町内遺跡発掘調査概報』平成11～13. 17年度 平群町教育委員会(2007)
- 20) 「梨本南2号墳の調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会報告会』平成9年度 奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会(1998)
- 21) 「平成18年度 三里遺跡発掘調査終了報告」平群町教育委員会(2007) [未刊行]
- 22) 「平成19年度 三里遺跡発掘調査終了報告」平群町教育委員会(2008) [未刊行]
- 23) 村社仁史. 「平成21年度平群町観光ボランティアガイド養成講座 見学資料04」梨本南1. 2号墳(2009)
- 24) 菱沼一憲. 「大和国平野殿庄の庄領と構造」『地方史研究』通巻30号 第53巻 第3号(2003)
- 25) 『東寺百合文書目録』第一 京都府立総合資料館(1976)
- 26) 『東寺百合文書目録』第二 京都府立総合資料館(1977)
- 27) 『東寺百合文書目録』第三 京都府立総合資料館(1978)

- 28)『東寺百合文書目録』第四 京都府立総合資料館 (1979)
- 29)『東寺百合文書目録』第五 京都府立総合資料館 (1979)
- 30)『鎌倉遺文 古文書編』第十一卷 (1976)
- 31)『鎌倉遺文 古文書編』第十四卷 (1978)
- 32)『鎌倉遺文 古文書編』第十七卷 (1979)
- 33)『鎌倉遺文 古文書編』第十八卷 (1980)
- 34)『鎌倉遺文 古文書編』第二十二卷 (1982)
- 35)「鎌倉遺文フルテキストデータベース」東京大学史料編纂所
- 36)田村憲美.「平野殿庄」『東寺とその庄園』京都東寺(教王護國寺)宝物館 (1993)
- 37)田村憲美.「畿内中世村落の“領域”と百姓」『国史学研究』547 (1985)
- 38)小泉宣右.「東寺領大和国平野殿庄の悪党」『國史學』70 國學院大學 国史学会 (1958)
- 39)井上良信.「東寺領大和国平野殿莊」『国史論集』(一) (1959)
- 40)網野善彦.「大和国平野殿莊」『中世東寺と東寺領莊園』東京大学出版会 (2007)
- 41)高田良信.「梵天山の松茸狩り」『法隆寺の謎』小学館 (1998)
- 42)蔭山精一.『斑鳩風土記』(2009)
- 43)「近世・近代、法隆寺村」『斑鳩町史』続資料編 斑鳩町史編集委員会 (1979)
- 44)『近畿日本鉄道 100 年のあゆみ』近畿日本鉄道編 (2010)
- 45)村社仁史.「近鉄生駒線の歴史」あすのす土曜講座資料 (2007)
- 46)『生駒市誌』(通史・地誌編) V 生駒市誌編纂委員会 (1985)
- 47)亀井龍彦編著『斑鳩の生活史』- 聖徳太子から 1400 年 - (1998)
- 48)蔭山精一.『そぞろ歩き・斑鳩散歩Ⅳ』(2008)
- 49)『生駒市誌』(資料編) IV 生駒市誌編纂委員会 (1980)
- 50)「信貴生駒電車沿線名所案内」信貴生駒電気鉄道株式会社 (1922)
- 51)種坂英次. 奈良県平群町の二次林における菌類資源. 近畿作育研究, 47, 29-39 (2002)
- 52) Tanesaka E. Wild mushroom food custom associated with Japanese red pine forest in a small town in southwestern Japan. Mushroom Sci. Biotechnol., 13, 143-147 (2005)
- 53)種坂英次. 奈良県平群町常念寺のきのこを描いた鬼瓦. 日本きのこ学会誌, 13, 109-111 (2005)
- 54)「奈良縣風俗志編纂資料」生駒郡平群村 (1915)
- 55)「信貴生駒 電車沿道名所案内」信貴生駒電鉄株式会社 (1927)
- 56)「昭和 4 年 奈良縣生駒郡平群村村勢要覽」平群村 (1929)
- 57)「上庄のあゆみ」上庄のあゆみ編集委員会 (2009)
- 58)松くい虫／奈良県公式ホームページ, http://www.pref.nara.jp/dd_aspx_menuid-4083.htm
- 59)企画展「平群の山 松茸事情」解説資料, あすのす平群(平群町観光文化交流館・町立図書館) (2012)
- 60)村社仁史.「平群の山 松茸事情」あすのす土曜講座資料 (2012)